

其後、2番教室に机を並べるものも年毎に増加していった様子であるが、それは日蓮宗大学が立正大学となり一般に解放された結果に依るもので、戦後更に経済学部等が開設され急激に学生が増加して、谷山・熊谷にキャンパスを拡張した事と通ずるものがある。

所詮、時代の流れであるが、今や時折、大学の門を潜っても何処にも往昔の面影を見出すことが出来ない。それが私にとっても大学自体にしても幸か不幸か判断はし難い。然し私自身にとっては50年前、青春の一刻を文学科2番教室に過したことが、私の人間形成にマイナスに成っているとは思えない。鈍愚であるが、2番教室に於ける師弟の間を超えた恩愛、尽きることなき友情は立正大学文学科卒業の私には何処からも得られなかった偉大な尊いあるものが、厳として私の血肉となっている事を心から誇りとしているのである。

(現日蓮宗管長・池上本門寺貫主)

私塾的雰囲気

石川存静

私は円本のはしりともいえる改造社の現代日本文学全集の出た大正15年に予科を終了して学部に進み、文学科で英語及び英文学を専攻し、小林多喜二の『蟹工船』が発表された昭和4年に卒業した。私の同期生は宗教科9名、哲学科1名、社会科5名、史学科11名、文学科17名の43名で、英文科（学生間の通用語）は山林慈征君と私の2名だけだった。文学科（英、国、漢）の講義は一階西側の奥にあった学内で一番小さい2番教室で行われた。草創期のこととて講座数が少なく、卒業するためには英文科生でも国文や漢文を取らざるを得ず、それでも不足なのでいろいろな講義を選択して、二階、三階の教室をわたりあ

るいたが、文科の学生は2番教室に自分たちのフランチャイズがあると思っていた。それで、「2番教室」というタブロイドを出して駄文を書いたが、3号くらいで消えてしまった。

当時の学生は全部宗門の子弟だったので、僧階取得の単位を取らざるを得なかった。「観心本尊鈔」と「開目鈔」とがその必修科目だったが、これは私にとってなかなかの難事だった。自分が僧職になるという決心がついていない上に、両講座担当の清水龍山先生の講義に使っていた論理が納得できないだけでなく、満足がゆかなかった。学年試験の前には、清水先生の宗学の継承を志していた同窓の中谷良英君から二本榎の寄宿舍で特別講義を受けたのだが、第1年度も第2年度も不合格で、卒業の年には試験後のある日、清水先生から2番教室に呼びつけられ、先生直筆の大漫茶羅に署名するように命ぜられた。先生の曰く、

「君は本尊鈔も開目鈔もわかっていない。然し、君は本学を卒業する単位は私の2科目を除けば全部合格しているので、不本意ながら最低の60点づつを与えることにする。そこで、私が死んで靈山浄土で宗祖におめにかかったとき、この大漫茶羅を開いて、君が大学卒業後も両鈔の研鑽に励んでいると報告したい。だから、研鑽を誓ってここに署名するように。」

私は先生のこの言葉に強く打たれ、先生の宗学研鑽の底に流れている強い宗教的信念に感動した。煩瑣な教義解説よりも、一見アナクロニスティックな先生のこの態度から、私は私なりに教義上の諸問題にアプローチする道を見つけたような気になった。

英文科は5名の先生が担当していた。その中心は加藤信正先生であった。先生は朝鳥の雅号で、小説、評論、詩、翻訳にわたって多彩な文筆活動をしておられた。蓬髪の肥満体で、教壇の上を左右に歩きながら、漫談調で随所にワイズクラックを飛ばし、逆説に満ちた講義をなさった。風貌は写真で見たG・K・チェスタントに似ていた。先生自身もひそかにチェスタントを気取っていたらしい。英米文学だけでなく、欧州文学にも言及し、日本文学の古典にも造詣

が深かった。明治・大正の文学はその中で先生自身が活躍していたので、国文科の現代文学の講座を持ったが、先生の主要講義は英文学史であった。英文学をこよなく愛し、時には腐れ縁といいながらも英文学と喃語した。大正15年から翌年の3月までの先生の最初の英文学史の講義は昭和2年6月に春秋社から『英文学夜話』という題名で出版された。その序文に先生は「喃語の部屋を提供して居るのは立正大学文学部の教室だ」と書き、小林慈征君と私とが「この書の一部を手伝った」とも書き添えている。これこそが、立正大学英文学史講座の最初のものである。先生は学究肌の人ではなかったし、私たちも学究的な講義を期待してはいなかった。時には大学の下の今のマックスファクター辺か、その前の国道になっている辺かにあった「甘酒屋」という喫茶店に教室を移し、ガラス板を敷いたテーブルの上に先生がチョークで書きながら講義をしたこともある。甘酒屋の主人はジャヴァ帰りだけに珈琲らしい珈琲を飲ましてくれ、先生もジャヴァ帰りだったので喃語はワーズワースから仏蹟のボロブドゥールに飛んだりした。こうした喃語の集積だけでは英文学の知識は得られないと思って、私は選択科目の受講をサボって時間を作り、大学図書館でケンブリッジの英文学史を斎藤勇氏や小日向定次郎氏の著書を参考にしながら読んだが、たいした収穫はなかった。

朝鳥さんが私の文学志向を刺激した点は非常なもので、特に1924年に文学部門のノーベル受賞者となったポーランドのウラディスロー・スタニスロー・レイモンチの「農民」を朝鳥さんが翻訳している姿からは随分と刺激された。それは翻訳というよりは創作に近い苦行をしているように見えた。これを秋・冬・春・夏の4部作として春秋社から出版し、先生はポーランド政府から文化勲賞ともいうべきものを得た。そこで、文学科生の有志で祝賀会を催したが、先生をはじめ誰しもが勲賞などというものに関心がなく、祝賀会はただビールを飲みながら文学を語って秋の夜の更けるのを忘れる会になってしまった。

市川又彦先生は朝鳥さんの早稲田の同窓の誼で、私が学部に入った年に立正

に出講するようになった。すでにG・B・ショウの翻訳者として文名が高かった。先生はショウの「武器と人」をテキストにし、あわせて英国近代演劇論を講じた。ロンドンに留学してショウに親炙していたためか、講義はユーモアと機智に富んでいたが、講読は可成り厳密だった。私は先生の講義に接してから急激にショウが好きになり、彼の皮肉と諧謔に魅せられて一時は卒論にしようかとも考えたが、その頃アメリカ演劇界で盛んに活躍していたユージン・オニールの「皇帝ジョウズ」や「毛猿」を読んで忽ち彼の擒となり、市川先生の指導で「オニール研究」を卒論にすることにした。

築地小劇場の銅羅の音が耳について離れなかった頃なので、私たちは何回か大学の講堂で近代劇を演じた。オニールの「アンナ・クリスティ」を上演したときに、私は演出を買って出たが、その演出振りは商業演劇に反抗しようとする気ばかり先に出た稚拙なものだったが、これまた市川先生の指導でどうやら学生劇として人前に出せるようになったのである。

朝鳥さんと市川さんとからは、今流にいうとインディヴィデュアル・アテンションを十分に賜わった。特に今だから白状するが、囊中が払底すると玉川瀬田の朝鳥家、下高井戸の市川家に押しかけて無遠慮に牛飲馬食した。お二人とも40歳前後で、奥さんも若く、いつも笑顔で夫妻して私たちを歓待して下さった。朝鳥さんは既に此の世を去ったが、市川夫妻と加藤夫人は今も健在でいられる。

シェイクスピアは畑功先生、ハーディは河辺治六先生であった。両先生とも慶応が本拠で、本宗の柴田一能師のアメリカ留学中の親友であった。私の手許にある大正6年の日蓮宗大学教職員名簿に両先生の名が見えたところから考えて、谷山には創立以来の出講であったと思う。両先生ともにテキストを丁寧に講読し、そのおかげで私の読書力は可成り増進した。

詩人の野口米次郎（ヨネ・ノグチ）先生はブラウニング詩集をテキストにしながら、盛んに文学評論を開陳し、時には新聞や雑誌に載せる評論を前以て教

壇で講じたりした。先生も慶応からの出講であった。

山本正美先生はJ・M・スィング、ミルトン・シェイクスピアを丹念に講読した。私の卒論指導教授の一人であったが、オニールは好きでなかったようである。

英文学関係以外で私の印象に残っているのは、武田祐吉先生の万葉集、田辺松坡先生の唐詩選、西宮藤朝先生の文学概論と美学、北沢新次郎先生の『宗教の利潤』（アプトン・スィンクレア著）の講読、保科孝一先生の国語学、三枝博音先生の独逸語講読であった。三枝先生はディルタイの論文抜粋や「ウェルフリンの美術史抜粋」をテキストにし、如何にも哲学者らしく、一語一語のベドイツングを厳密に規定し、コンテクストを重視し、更に作者がこの表現を用いねばならなかった思想上の必然性にまで及ぶ講読で、受講者は2、3名、時には私一人だけのこともあった。その頃、加藤朝鳥先生は英文学史の参考書としてF・T・パルグレイヴ「ザ・ゴウルデン・トレジャリ」を使っていたが、その解読が余りにも達意的であったので、私はその不満を三枝先生に洩らしたことがある。すると先生から、「君が朝鳥さんに期待するところが、そんなことでは駄目だ。それでは君の文学的素質は伸びないよ」と私は窘められた。三枝先生は、47年後の私を見通していたようである。

こう書いてくると、私は随分こまめに教室に出たようだが、実はさに非らずで、金があれば大学下のビリアードで遊び、文化亭のライスカレー、メンチボール（今のハンバーグ）、カツライスを食べ、甘酒屋に立寄り、夜ともなれば銀座のおでんや「お多幸」やビア・ホールに行き、資金のないときは渋谷食堂（銚子一本12銭、ライスカレー8銭）で間にあわせたりして、友と共に文学を談じ、築地小劇場や映画館を覗いていたのである。ただ、大学の図書館をはじめ、あちこちの図書館へはよく行き、大学下の今のガソリン・スタンドのある所であった中古書専門の若林書店とは親しくなった。

大学へ入ったものの、私は卒業したり、資格を取ったりすることには余り意を用いずに、草創期の自由な私塾的雰囲気の中で、気取った言い方をすれば、文学を通しての人間経験を積み重ねていたのである。春は桜の花が咲き、爽涼の秋には美しい富士の見える谷山は私の心の故里である。19世紀の英詩人アンドリュー・ラングの詞を借りて、**Rissho Daigaku on the Yayama Hill, / a haunted site it is to me!** と叫びたくなる。

(現立正大学学園理事)

思 い で の 記

新 倉 海 北

私は今は古びている校舎だが、その校舎が当時近代的な鉄筋コンクリート3階建の新校舎であった、そこから巣立したのが昭和2年3月のことで、文学部社会学科第1回の卒業生であった。思い起こせば星霜50年になんなんとしている。その間幾多の変遷はあったものの、発展につぐ発展は今日見るべき大なるものが如実に顕れている。

そこで私は思出の一、二を挙げてみると、学生時代には、日蓮宗大学から立正大学へ昇格した当時で、単科大学ではあったが、この時始めて文学部の中に各科が創設され、立正精神を基盤として、当時入学生も程んど全部が僧籍にあった者だったが、この時から一般からの志望する学生が、入学すると云ふ変動があり学科別から見れば、宗教科、文学科、社会学科、哲学科、その外専門部等があって、学生数も、かつては谷山健児五百と歌われたが一躍千数百名にのぼったことは、驚きの一つであった。

当時のクラブ活動の思いでの一つに、現在まで伝統を持続しているものの数